

各テーマごとに論点を整理されて、できる限り分かりやすく記述する努力がされている。ここでの論点を、科学的な哲学・歴史学・社会政策や労働問題の研究者と論議すると「現代社会の労働」について、さらに深められると思う。共同研究の機会が望まれる。

第2部は、執筆者の実践や運動団体との共同での成果がよく整理され反映した読みごたえのある内容であった。これは、ぜひ多くのいのちと健康を守る運動に関わっている方々に読んで欲しいし、運動団体のもっている要求・政策や課題も執筆者にもっと提起して欲しい。そして、「現代労働の課題」を共にさらに実践的に深めていきたいと思う。

著書全体を通して執筆者の意欲的な努力が感じられ、資料や参考文献、引用資料・文献も豊富であり、学習テキストとして、すぐれた内容をもっている。多くの労働者、研究者にぜひ読んで検討してもらいたい書物である。

(北大路書房・1997年4月刊・2,500円)

(佐々木 昭三・会員・愛知働くものの健康センター事務局長)

塩田庄兵衛著

『私たちの自由民権運動』

本書は社会運動史、労働運動史の権威である塩田氏が、自ら「末端に参加してきた」という「現代の自由民権運動」(はしがき)としての「電力労働者の半世紀の闘い」を中心に、氏の最近のエッセイを合わせて一書にまとめたものである。

ここで「電力労働者の半世紀の闘い」とは戦後の産別会議当時の電産労組の闘いから今日の中部電力、関西電力、東京電力の労働者による人権侵害・思想差別撤廃闘争にいたる長い闘いを指している。私は氏の驥尾に付して東京電力の人権侵害・思想差別撤回闘争の支援に参加した一人で、先に谷江武士とともに著した『東京電力』(大月書店)において、独占企業としての東京電力の企業分析をおこない、東京電力の反共労務管理政策を批判し、労働者の闘いを紹介したが、氏は本書で労働運動史家の立場からこの闘いの歴史と教訓を明らかにしている。さらに氏

によれば本書は新日本新書の『河上肇』、『幸徳秋水』の評伝とあわせて三部作を構成するという。氏の本書に込めた思いが伝わってくる。

本書の「第1部 私の戦後史から」で氏は人類の歩んできた道を、「自由と民主主義の拡充・充実」として語っている。60年安保闘争、全電通長岡事件を題材とした映画「母さんの樹」、緒方宅電話盗聴事件など戦後の統一戦線や基本的人権を守る闘いの流れから自然に「第2部『星と稲妻』の旗——物語 電力労働者の半世紀の闘い」へと入っていく。裁判闘争のなかでの原告の証言をフルに活用して綴られたこの部分は本書の中心をなすとともに、史家としての氏の本領が発揮されているところでもある。ちなみに、ここでタイトルとされている「星と稲妻」とは電産の組合旗のシンボルを指している。

この闘いは、やがて95年9月の関電・最高裁完全勝利判決、12月の東電の地裁判決5連勝に続く全面解決、97年3月の中電・地裁全面勝利判決を迎えるが、そこにいたる20年を越す電力労働者の基本的人権を守る長い闘いの勝利は、日本と世界の自由と民主主義の発展にとって計り知れ無い意義をもっている。同時に今日なお全国の数多くの職場では資本の反共労務政策との闘いが日夜続けられているが、本書はそうした闘う労働者が元気の出る励ましの書となっている。本書が日本の労働者のなかに広がれば広がるほど、労働者の基本的人権を守る闘いが前進することは間違いないであろう。

(新日本出版社・1997年9月刊・2,200円)

(角瀬保雄・常任理事・法政大学教授)

